

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 42 号

発行日
2024.12. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○「一」、「二」、「多」…これは、何を意味するか？

一応、ここでは、令和6年の締めくくりということになるが、標記の「一」、「二」、「多」とは、果たして何を意味するか？今の私が（これまでもそうだが）、そんな大それたことを口にしよとは、ある意味不可思議千万ではあるが、あのネット記事に誘われて、ここで書いてみることにした！その記事によれば（今回は、直接紹介はしない）、今の日本は「内乱状態」にあるというものであった！「内乱状態」とは、何と物騒な表現かと思つて読んでみたのであるが、明治維新後と太平洋戦争後の、我が国の国情の推移が似ており（特に、外国との関係において、同じようなことが、再び起こるのではないかとというようなことであつた（多少、読み違いをしているかもしれないが）。

しかるに、「和を以て貴しとなす」とか、「万機公論に決すべし」とか、我が国には、このような民主主義の根幹をなす思想があるが（ただし、そうでなかったからこそ、それが希求、標榜されたとも言えるが）、一党独裁でもなく、容赦ない二者択一の選択社会（二大政党制）でもなく、多くの人間（勢力）の意思が、可能な限り擦り合わされる社会（多党制）が、今般の選挙では実現されたとも言える！だから、多少の混乱や遅滞があつても（ここが問題だと言へば、そうなのだが！）、ここで言う「内乱状態」には当てはまらない？否、まったくもつてそうなつてはいけなないのであるが、問題は、これに対する、現状の、為政者やそれを選んだ国民の意識や覚悟？がどうなのかである！ただ単に、気がついてみると、そうなつてしまつていてというだけであれば、それこそが危ないのである？果たして、どうなのか？

○2度目の宮崎行…二つの「かつやく」が絡む？

今年2度目の宮崎行については、先号でも触れたが、ここでは、少し盛つた話をしておきたい。目的は、孫の「活躍」を見に行くということであつたが（小4三男の音楽会、高1双子のサッカー大会、もう一つ、別の「かつやく」が絡んだのである！前者は、親バカならぬ、爺バカ振り、ほんの少しだけ（本当である！）發揮してきたということであるが、繰り返しになるが、それぞれが逞しく育つていくように（上手かどうかはともかく）、とても安心した。そして、嬉しくもあつたということである。だが、一方で、私には、もう一つの「かつやく」、つまり「〇〇筋」の不調が、終始付きまとつたのである（本当に大変であつた！）。最近では、特に旅先では、常に悩まされるのであるが（下肢の不調も含めて）、そのことが、旅行や遠出に対する億劫感を募らせている！まさか、こんなことまで我が身に起こらうとは…高齢になるとということ、まさにそういうことでもあるのであろう（自業自得と言われれば、それまでであるが）。

ただし、会場への行き帰りの昼食（懐かしい「山椒茶屋」のうどん／店名は覚えていないが、有名なラーメン屋でのそれ）とか、古代史関係では、帰路に立ち寄つた「瓜生野八幡神社」への訪問は、楽しい一時であつた（他にもあつたが！）。ちなみに、同神社は、典型的な八幡神社であつたが、観光客が行くような神社ではなかつた！しかし、この地には、何故か？かの「素戔嗚命の八岐大蛇退治」の説話があるのである（他にも、いくつかあるようであるが、九州ではこれだけ！）。その理由を、知りたい！

○「眼」と「目」の違いとその書くことの意味？

ところで、先日（10日くらい前）、ふとしたことから、「目」と「眼」の違いは何かと思ひ、ネットで調べてみたら、「目」は形状から機能まで幅広く使われるが、「眼」は医学の専門用語と「見る行為」に特化される傾向にあるとあつた。そして、「目」はその形や外観（形状）から見るという行為、さらに「目」や「見る」に連関する比喩表現まで幅広く使うことができる汎用性の高さに特徴があるともあつた。例えば、「見る行為」に關係する「形や外観（たれ目、つり目）」「見る行為（お目にかかる）」「見た印象（見た目、目つき）」「能力（目が悪い、目が高い）」「評判（世間の目）」「見る行為」に關係しない「形が目と似ている（台風の目、魚の目）」「区切りをあらわす（二つ目、一番目…）」「状態や性質（落ち目、焦げ目）」「体験（大変な目にあふ）」といった具合である（本当に、よく思いついたものである！）。

一方、「眼」という漢字は、医学や生物学の専門用語以外でも使われるケースがあるが、『目』と比べると『見る行為』に特化した使われ方をする傾向がある」とあつた。例えば、「見る行為」に關係する「審美眼、観察眼」「見る行為」に通じる「眼力、心眼、慧眼」といった具合である。なお、「医学や生物学上の『目』の正式名称は『眼球』、『目』という漢字は使いません。そのため医学や生物学での『目』に關する専門用語のほとんどは正式名称の『眼球』に由来する『眼』という漢字が使われる傾向」ともあつた（それは、そうであらう！）。

なるほどと、改めて思つたが、私は、「書くこと」は、ある意味「見ること」と同じではないかと思つてゐる！だから、「眼」が重要だと！ただ、それが、今は、いわゆる「仕事」ではないことが少し歯痒い？だが、それもまた、現在の私（達）に与えられた宿命と思つて、やつていく他ない！ある意味、それしか出来ないのでから！ただ、「眼」の生物学的機能は落ちる一方である！ちなみに、脊椎動物の進化の過程では、「眼」が最初に備わつたそうである。「世界を視る」ということは、原初からつきあいのある「特徴」（生存には必須！）だということであつたわけである。次が、「歯」と「顎」だそうである！

○「シンクレティズム」という言葉があった！

さて、こちら(堂本)の方も、少し、今年の締めみたいなのを書いておきたい！だが、それに相応しいかどうかは極めて怪しいが？ただ、ずーと考えてきたことであるので(以前少し触れたこともある)、ここで敢えて挑戦してみたいということである！と言うのも、本日(19日)、面白い言葉に出くわしたからである！何か納得させられるものが、そこにはあるということである!!

それは、シンクレティズム (syncretism) という言葉であるが、「融合、混成、ごたませ」という意味であるそうである(神仏習合の「習合」を、英語ではこう言うらしい)。「あまりいいニュアンスでは使わない」とあるが、我が国には、神仏習合も含めて、あらゆる場所に「神(八百万神)」が存在し(自然崇拜)、一方で多種多様な神社も建立されてきた。さらには、現在は、キリスト教も含めて、ありとあらゆる宗教が、生活の中に入り込んできている！何という無節操(無宗教)？そんなことさえ言われてもいるわけである!!

しかしながら、別な言い方をすれば、そのようにしていかねば、「遠絶にして、小さな島国」では生きてこれなかった？そういうことであつたのかもしれない？言わば、生活(存)の知恵ということであるが、それが、縄文、弥生、古墳時代の人々に重層的に積み上げられてきた(それぞれ渡来人であるが、そのすべてが日本(人)をなしている!)ということである!!

ちなみに、その言葉の語源は、「『クレタ島の人』 : エーゲ海に浮かぶ : 現在はギリシアに属しているが、アジア、アフリカ、ヨーロッパのどこからも手ごとく場所にあるため、古代からさまざまな民族によって、とつたりとられたりをくりかえしてきた。強大な敵にそなえるためには、いがみあう勢力でも手をにぎりあうしかない。しばしばたませ混成クレタ同盟を結成した歴史がある」ということらしい。

○「卑弥呼」と「間得大君」！おそろくそれは、同じ!!

上記とも関わるが、これもまた、折角であるので、ここで触れておきたい。それは、沖繩(琉球)における太陽信仰のことで、第一尚氏時代の琉球神道における最高神女(「間得大君」えいびき 制のことである。彼女は、琉球王国の最高位の権力者である国王の「おなり神」に位置づけられ、国王と王国全土を霊的に守護するものとされた(そのため、主に王族の女性が任命された)。琉球全土の祝女の頂点に立つ存在であり、命令権限を持った(ただし祝女の任命権は国王に。また琉球最高の御嶽である斎場^{セーファ} 御嶽を掌管し、首里城内にあった十御嶽の儀式を司った。「琉球研究の泰斗」鳥越憲三郎氏は卑弥呼と男弟の統治形態を見て卑弥呼の統治形態を琉球国の間得大君と国王のような祭政二重主権の統治形態であると判断した。これを見た漢人がその独特な統治形態を理解できずに『女王国』だと報告したのだという)ともある意味、そうかもしれない!!「ヒメ・ヒコ」制とも言われるが、かの邪馬台国はこうした統治・祭祀形態であつたということである!!

・「短歌に託して今年締めを意識しながら」
・「二」「三」「多」 考えてみれば
人の世の基^い すべてが絡む!

・孫の成長 楽しみだが 他方で気になる
我が娘達!! 親となろうとなかろうと!

・目と眼 生物学や医学はともかく
それに託す言葉 様々にあり それは何故?
・シンクレティズム 語源はともかく
生存の知恵? だがいずれも 眼^{まなこ}がなす?
・卑弥呼に悩まされる 我が国の古代史?
案外その答えは 沖繩にあるのかも?!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕④

○改めて、古代九州の全体像を探る―その13―
では、その507~531年に在位していたとされる人物(記紀に言う継体天皇)とは、実際は誰であつたのか?そこでクロースアップされてくのが、かの百済王族(仇台系王族)「昆支^{コンシ}」(「卑弥呼」?)の弟「軍君/男弟王」である!彼は、同母兄の「昆支」と共に、九州倭国に「人質」として送られていた(兄が「筑紫倭国」、弟が「豊国倭国」へ!!)!

すなわち、それまでの倭国王権が、百済系家佛流系余氏(「藤原」)に牛耳られ(倭の五王政権)、その後、半島の百済王族「温祇系余氏」と「仇台系余氏」(「熊津」政権)が、その傘下に組み入れられ、その皇子達が、人質として倭国に送り込まれていたということである!その意味で、百済と倭国は一体化されていたということである!だから、倭の五王は「百済への軍事統治権を執拗に主張したものである」として、百済復讐戦である「百済の戦い」にも、無謀にも加わつたのである!「熊津系余氏」!!

ところで、古代の大豪族であつた「物部氏」であるが(尤も、その最初の出自はつきりしない)、単一族ではない!!、彼らが関わっている、かの有名な「七支刀」のことが、ここで思い出される!と言つても、それが、百済王から倭王「旨」に送られたものであるからである(通説では669年とされているが、468年のようである!これもまた熊津系余氏!!)現在、その刀は、奈良県の「石上神宮」にあるとされるが、不思議なことに、それと同じ刀をもつた武官の木像が、福岡県みやま市の「磯上物部神社」(「さかやまの宮」)にあるのである!!

ちなみに、倭王「旨」は、倭の五王の中に入っていないが(途中、本国へ帰っている)、二期期、筑紫倭国の大王となつていたようである!要は彼は、百済からの「人質」として「筑紫倭国(筑後大牟田)」に送られていた、仇台系王族の「昆支」と考えられるのである!また、妻弟の軍君/男弟王(「牟婁」)に、彼が「継体天皇」とされた!!も、その分国としての「豊国倭国」に人質として送られていたということである!!(つづく) (堂本) (編集後記) 今年も、あと一日で終わる!6回目の年男であつたが、娘・孫達や友人との再会も含めて、ほとんどいつもと同じだったように思う。ただし、身体の衰えは、着実に進んではいる!来年はさらに、それが顕著とはなるであろうが、自分なりに頑張つていく他ない!とにかくみなさん、よいお年を! (井上/堂本)